

ラモン・リュル思想の現代的意義—その2—

布施 温

El pensamiento de Ramón Llull y su significación en el tiempo moderno—Segunda parte—

Yutaka FUSE

0. 初めに

今回はラモン・リュルの思想の背景、そして、「円環的」方法についての解説に止めたが、今回は彼の思想の及ぼした影響をもう少し詳しく述べ、また語学と自然言語処理との関連について考察してみたい。

1-1. ダンテの「普遍文法」

今回もウンベルト・エーコの「完全言語の探求」の著述から始めよう。ダンテの著作の一つに『ダンテ俗語詩論』“De vulgari eloquentia”がある。彼の言語観は俗語であるイタリア語ではなくラテン語で書かれたこの著書に表明されている。中でも注目すべきことはチョムスキーを想起させる「普遍文法」の観念が見られることだとエーコは指摘する。

それは、アダムの事物に名前を与えるよりも先に神と話すという事実、ひいては、アダムの言語を作り出す以前に、神がアダムの言語活動の能力を与えたという事実を、『創世記』のアダムとイヴの挿話に触れて強調していることから分かるとする⁽¹⁾。

ダンテの上述の本には *forma locutionis* (言語形式) という言葉が出てくるが⁽²⁾、エーコは、この言葉を単に言語活動の能力を指すのではなく、普遍的言語の存在、あらゆる自然言語の根底に横たわっている規則の存在を主張した様態論者の流れをダンテもまた汲んでいることを示しているとし

ている⁽³⁾。また、『ダンテ俗語詩論』の注釈者岩倉具忠によれば、この言葉はチョムスキー流に言えば universal language に関わる問題であると言う⁽⁴⁾。このようにダンテは forma locutionis を単なる言語としてではなく諸言語の普遍的母胎、一種の完全言語と見なしていたと言えるだろう。

しかし人間に共通かつ固有の言語能力が備わっていることは、何もダンテを待つまでもないことであろう。中世においては「普遍文法」の思想が広く普及していたという事実があるからである。

その基本的な思想は「文法は、あらゆる言語において、表層ではさまざまな変化があっても、実体としては唯一にして同一である」。このような主張はロジャー・ペーコンにも出てくる。

エーコはさらに「それゆえ、ダンテは、神によって与えられた言語形式を、現代の私たちがまさにチョムスキーの生成文法で扱われる普遍原則を想起させるような一種の生得的メカニズムと考えることができたのである。(そのうえ、生成文法の着想のもとになっているデカルトとポール＝ロワイヤルの文法学者たちの合理主義的理想は、中世の様態論の伝統を 17 世紀に復興させたものであった)」としている⁽⁵⁾。

このように論を進めていくと、ダンテに生成文法の原理を見いだすことは可能かもしれないが、いかにしてほぼ無限の文を生成することができるかという方法論の面での寄与は見いだせるだろうか。むしろそれはラモン・リュルに見いだせるのではないだろうか。そこにたどり着く前にもう少しダンテの言語観を見よう。

1-2. ダンテとヘブライ語

ダンテは「俗語論」でアダムよりも先にイヴが話したという旧約聖書の記述に対しては、ダンテは「しかしたとえ聖書に女が最初に口をきいたとあっても、男が最初に口をきいたと信ずる方が論理にかなっている。人間のかくも高貴な行為が、女よりも先に男の身に起こらなかったというのはふさわしくないとと思われる」。としてさらに、では何という言葉を発したかについては、「まさに『神』を意味することば、すなわち E1 であったことは、まともに頭の働くものならだれにでもすぐわかると私は断言してはばからない」、アダムはまず神に対する喜びと賞賛の声を発したのであるとしている⁽⁶⁾。

全ての事柄を初めて行う者は、あるいは主導する者はまず男であらねばならないとする考えの現れは洋の東西を問わずに見られる、例えば、「古事記」の「國作り」伝説における、イザナギ、イザナミの関係に相当するだろう。男性原理が支配するセミティックの諸宗教にあっては、最初は男ということで納得できるが、女権の強かったヤマトでもまず男からというのは面白い。

このようにダンテは言語の起源または言語能力は「神による」ことは自明のこととしている。しかしギリシャではその問題は一般的な哲学上の題目として扱われ、言語を含む人間のあらゆる種類の制度は、どの程度まで「自然で」あり、どの程度まで「慣習による」ものであるかということが議論されたのであって、言語の起源を神の求めるダンテは極めて中世的であると言える⁽⁷⁾。

言語の起源または言語能力に関する記述は当然のことながら聖書にたどり着く。ヨハネ福音書の冒頭の句、「初めに御言葉があった。御言葉は神とともにいた。御言葉は神であった」や『創世記』第2章の神がアダムに全ての生き物に名前を付ける能力を与えたと言う句であろう。ここに使われているギリシャ語「ロゴス」は「コリントの信徒への手紙1」13章に頻出する、「アガペー」と共に、ヨーロッパ理解のために最重要キーワードだと思ふ。

しかし世界では言語の他の面について関心があった所もある。例えば今日でも記述文法の模範とされる記述を行った古代インドのサンスクリット学者たちの間では「言語は創造されたのか否か」が議論の一つであった。しかし、この問題は初期のギリシャ人やヘブライ人の議論には現れなかった。そこでは最初の語が誰によって、どのように、そしてなぜ創造されたのかという問題に感心が当てられ、言語がそもそも創造されたものか否かにという問いは、初めから議論の対象にならなかった⁽⁸⁾。

ダンテに限らず当時の人々にとってはヘブライ語は人類の最初の言葉はヘブライ語であると考えられ特別な意味を持っていた。バベルの塔の崩壊以降の言語の混乱を「完全な言語」の消滅と考え、神と人間が自由に対話できた時代の言語（原ヘブライ語とでもいうべきもの）を復興させようとするために多くの学者が様々に努力したし、比較言語学が成立した19世紀にあってもまだ勢力を保っていた⁽⁹⁾。

このような「完全な言語」の探求には実に多くの努力が払われ、時には

「空想言語」というべき発想もあったし⁽¹⁰⁾、それはまたエスペラントのような人工言語へと展開していった。

また言語の起源に関する問題は知識人の関心を集めた。その中でもヘルダーやルソーにはそれぞれの「言語起源説」があるが、1866年、パリの言語学会は、資料がはるか昔の闇のなかに失われていて推測の対象にしかなりえないようなテーマについて、その真に科学的な研究の可能性に疑いをいただき、普遍言語であれ、言語活動の起源であれ、これらについては一切の論文発表を拒否することを決定したのはよく知られていることである⁽¹¹⁾。

2-1. デカルト、ポール・ロワイヤル文法、チョムスキー

チョムスキーは“Aspects of the Theory of Syntax”を刊行した翌1966年に、言語理論の歴史的な回顧的展望により、自分の理論の裏付けを狙った“Cartesian Linguistics”を上梓した。彼は自分の理論との類似性をデカルト哲学に、言語への具体的関連をポール・ロワイヤル文法に見いだした。

2-2. デカルトの言語観

デカルトは言語についてまとまった著述をしていないが、それにも拘わらずチョムスキーが彼の理論は「デカルト派」の流れを汲んでいると言うのはなぜだろうか。

その当時ラ・メトリに代表される人間を機械のうちで最も複雑なものに過ぎない、猿が話が出来ないのは「ことばの器官の何かの欠陥」によるのであって、適当な外的刺激を与えて訓練を施せば遂には言語を知ることになるだろうと言うような考えに対して、「人間言語はその正常な使用において外的刺激の制御から自由であり、単に伝達的な機能に役立つのではなくむしろ思考の自由な表現、新しい状況への適当な反応のための器具である」と言う点にあることを、我々は見てきた。」⁽¹²⁾ として、さらに精神の発露としての言語には普遍者が想定され、それが全ての人間に生得的に備わっているというデカルトの考えに生成文法との接点があり、また人間は言語という有限の手段を用いながらも殆ど無限な表現を作り出すことが出来ると

いう、第1に普遍者（文法）の存在と第2に創造的な文法機構が想定され、まさにこれは生成文法の根本原理に一致することを見いだしたのである。

チョムスキー自身は、彼が「デカルト派」と名付けたからと言っても、必ずしもそれがデカルトとともに新しく始まったものではない、さらに以前の言語学的探求に根元をもっていると述べているにも拘わらず、訳者の注には「普遍的文法がデカルトに起源を有することは常識である。」⁽¹³⁾と断定しているのは説得的でない。

2-3. ポール・ロワイヤル文法を見てみよう。

1660年にポール・ロワイヤル修道院の二人の隠士、C. ランスローとA. アルノーによって書かれた『一般・理性文法』は後世の言語学思想の発展に大きな影響を及ぼした。

彼らは古典語やヨーロッパ各国語の教科書も編纂したが、いずれも既知の言語すなわち母国語で書かれており、例えばラテン語の学習の際には最初からラテン語だけで教えるという教授法が一般的だった当時においては革新的なものであった。

個別言語について書かれた文法書の狙いが個々の言語の学習を容易にすることにあったとすれば、彼らの主著『一般・理性文法』（以下この項の中では『文法』）の狙いは、諸言語間には様々な相違があるがそれにも拘わらず、すべての言語が共有する文法的特質について説明を与えるものであると同時に、言語と思考の関連を理性によって説明しようとしたものである。表題の「理性」の意味はまさにここにある。『文法』の言語的事実と思考の区別は、チョムスキーの深層構造と表層構造の2元論に対応するとされている⁽¹⁴⁾。チョムスキーの『デカルト派言語学』は深層構造と表層構造の概念が表明された“Aspects”の1年後の出版だから、彼が方法論的に、ポール・ロワイヤル文法を援用したのもうなずける。

ポール・ロワイヤル学派にはもう一つ『論理学』という著書があり、これは「思考の技法」を研究することを目指し、『文法』と表裏一体のものである。

エーコは、18世紀の啓蒙主義の多くの思想家たちは、記号論の次元では、ポール・ロワイヤルの『文法』と『論理学』のうちに表明されたデカルト的諸原則の影響を受けているとする。彼らは言語と思考と現実のあいだに

存在する完全な同形性を突き止めようとする。そして、「あらゆる言語に共通の基本的な諸原則が存在しなければならない」と主張するのである。

2-4. デカルトの「方法」

デカルトが『方法序説』の著者であるのは周知のことだが、その「付録」に述べられている解析幾何学の創設者としても名高い。彼以前の幾何学は難しい問題でも例えば補助線を一本引けばたちどころに解けるとしても、そのためには訓練と直感が必要であったが、解析幾何学では定理または公式に従ってただ計算をすれば誰でも同じ結果を導き出せるという点で画期的であった。いわゆる初等幾何学の名称で呼ばれている学問では接線の方程式はまず思い浮かばないであろう。従ってこの「方法」は直接的にまた間接的に後の微分積分学への道を開くことになった。

彼は秘伝的な「術」から、誰でも扱える「方法」を確立したのだ。

この誰でも同じ結果を導き出せるということは、まさに現代の科学の要請に適うものである。チョムスキーは『デカルト派言語学』で彼の方法論はデカルトのそれであると認識しているのはまさにこの点においてであろう。

現在の生成文法理論は自分たちの方法をまさに「自然科学」と主張している。いわゆる Universal Grammar (UG) を唱える学者は、生成文法概念を関数表示で示すと次のようになるという。

普遍文法(初期データ) = 個別文法

ここで、普遍文法は言語獲得開始以前の脳/精神の構造としての文法の初期値、それに初期データとは言語獲得に必要な十分な情報が作用して、個別文法つまり各人が話す言語になるということだ⁽¹⁵⁾。

別の表現をすれば、ヒトはその生物学的特性として脳の一部に「言語機能」と呼ばれる器官を持って生まれ、この言語機能が異なった安定状態に達した結果が母語話者が脳内に持つ言語能力であるという仮説を生成文法理論は提出している⁽¹⁶⁾、ということになる。

人間の脳内にはブローカ中枢やウェルニッケ中枢などの言語中枢があることはよく知られている。他にも色々見つかりそうだ。つまりは言語活動は神経細胞の働きと言うことか。しかしニューロンの動きをいくら精密に記述出来たとしてもそれで言語の本質を捉えたことにはならないであろ

う。それはコンピュータにより全ての言語活動が説明できることを期待するようなものでないだろうか。またある家系にはある種の言語障害の頻発すると言うことで文法遺伝子なるものが見つかったという報道がなされたことがある⁽¹⁷⁾。もしあるとしても遺伝子治療の一環として治すことが出来るのだろうか。このような方法を科学的とでも言うのだろうか。

この方面の研究はそれなりに進めて欲しいが、自分たちの「方法」が自然科学であると主張するあまり本質を見失なわないよう注意が肝要だろうし、自分たちの「方法」が唯一の「言語学」であると声を大きくすることも正しいあり方とは思えない。認知科学の発展や他の分野と繋がるような貢献は十分に評価している。

デカルトが「方法」を生み出した背景には彼が伝統的な記憶術やリュルの「術」に対して強い関心を持っていたことが挙げられるのは興味深い。それは彼自身の記憶力の弱さに由来していた。彼は記憶力の優れた人たちに対して羨望の念を抱いていた⁽¹⁸⁾。ヨーロッパ中世を代表する知識人である膨大な『神学大全』の著述を残したトマス・アクイナスの例を挙げてみよう。トマスの弟子たちや書記たちの証言によれば、彼はよく僧坊で、一度に三人の（ときには四人もの）書記に異なる題材を本も見ずに口述筆記させていたという⁽¹⁹⁾。また、注意すべきことは同時代の人々がトマス・アクイナスに贈った最大の賛辞は、トマスの著作にではなく、その記憶力に向けられていたのである⁽²⁰⁾。このように、西洋の近代文化が根本的に記録文化であるのに対して、中世の文化は根本的に記憶文化であるということだ⁽²¹⁾。現代でもインドのサンスクリット学者は大変な量の記憶を蓄えているという。またイスラム世界では聖典『コーラン』のアラビア語原典での暗記が奨励されており、全部を暗記した人には「ハーフィズ」の称号が与えられ尊敬を受ける。なお『コーラン』はアラビア語では「クルアーン」と発音され、意味するところは「朗唱されるべきもの」である⁽²²⁾。また書物はまずは音読されるものであって、それが黙読するものとなったのは当然のことながら印刷術の発達以降である、書かれたものは補助的なものとされ「声の文化」が支配的だったのだ⁽²³⁾。

それまで脳内に蓄えられる記憶（内部記憶）が、次第に印刷術の普及と共に書物（外部記憶装置）という他の媒体に移っていった。しかし暗記ないし記憶の重要性は今も昔も変わらないであろう。

3-1. リュルの「術」と「生成文法」

私にはエーコがダンテに生成文法の萌芽を見いだしたことは、少なからず驚きであった。もしも、そうならば、リュルは、個別の言語を超越した方法を提供したことで、ダンテ以前にも萌芽があったといえるのではないか。次にリュルの方法を見てみよう。

ダンテが生成文法の原理に近い構想を生み出したというエーコの説を認めるとするならば、ラモン・リュルもまた同じような思想を持っていたと言えるのではないか。もっともエーコは「完全言語の探求」ではそのことに触れてはいないが。次の 2 点でそういえると思う。

まず第 1 に、あの「結合術」で 3 つの円盤を回転させることで、非常に多くの命題を生み出し、またそれらの関連を導き出した。これは少数の規則から多くの文を生成するという意味で、チョムスキーの初期の著作“Syntactic Structures”の冒頭の部分、“From now on I will consider a language to be a set (finite or infinite) of sentences, each finite in length and constructed out of a finite set of elements. を思い起こさせるものがある⁽²⁴⁾。この set は数学の集合論(set theory)を意識して使っているので、その日本語訳では単に「集まり」となっているのはあまりいただけない。

リュルの結合術によれば 3 つの円盤に T という文字を挿入しその前の文字は第 1 図形と関連させその後の文字は第 2 図形と関連させることで結合の数は合計、 $({}_9C_3)84 \times ({}_6C_3) = 1680$ になる。このように比較的単純な方法で非常に多くの結合を生み出すことのできる方法をリュルは提起しているのである。なおリュルはただ単に回転させるだけではなく、命題間の繋がりを重視していることに注意したい⁽²⁵⁾。

そのように多くの命題が生成されたとして、それら全てが意味のあるものとは限らない。どのようにして無意味な命題は排除できるのか。これはかなり難しい課題であって、最終的には人間が判断することになる。その際には個人差または民族差は生じないであろうか。ある個人ないしある民族にとっては価値があっても他の個人にはまた他の民族には無価値ということもあり得るだろう。そうなる絶対的な基準はどこにあるのだろうか。普遍的な論理を目指すと言っても果たしてそれは可能であろうか。彼が必死に非キリスト教的かつ非ヨーロッパ的な諸宗教から示唆を汲み取ろうと努力したにも拘わらず(彼をめぐる環境はそれが可能であった)、結局は挫

折してしまったのは、西洋キリスト教の伝統で扱われる世界の組織化でしかなかったからだ⁽²⁶⁾。

これを言語に当てはめてみよう。確かに少数の規則から多くの文が生成される。しかしそれら全てが意味のある文とは限らない。文法的には正しくとも意味の無い文も出来てきてしまう。結局はその言語を母国語とする人の語感に頼らなければならないだろう。この点でも生成文法と似ているところがあると言えるだろう。

第2に彼の方法は記号による結合であって個別の言語に依存しないことに注意したい。もっとも多少の変更は必要になるが記号処理には変わりはない。これは後のベーコン、デカルト、ライプニッツなどの普遍論理学さらに、現代の記号論理学の企てとつながるものを持っている。言語に関して言えばまさに初期の生成文法の処理法を思い起こさせる。チョムスキーの『文法の構造』を読めば、だれでもまずこれは数学的ないし記号論理的な理論であるという印象を受けるのでないか。

3-2. ライプニッツとの関連

デカルトはリュルの「術」に関心を抱いたいたが、もっと直接的な影響を受けた学者にライプニッツがいる。彼は1666年、20歳の時に、『結合法論』を書いた。名前からリュルの影響を受けていることは明らかだ。その中で彼はリュルの辞項の数を9個に減らしたことを批判しているし、 m 個の対象のあいだで可能なあらゆる組み合わせを探し出す公式も提示している⁽²⁷⁾。リュルは神学的な理由から真ならざる命題を生み出すような結合は拒否したのだが、彼には無限の数の組み合わせが魅力的であったのだろう。

エーコはまたライプニッツにはリュル、ニコラウス・クサヌスなどと繋がるエキュメニズム（諸宗派和解主義）的情熱をも見いだしている。それは普遍的なキリスト教という観念、ならびにヨーロッパの和平という観念と相通じる。そのための方法は、当時盛んだった普遍言語を通じてではなく科学的言語の創造を通じてであった⁽²⁸⁾。

またあらゆる学問に通じていたライプニッツは生涯を通して普遍的な百科事典の構想を決して放棄することはなかった⁽²⁹⁾。このようは構想はいわゆる直接に『百科全書派』に繋がるものだが、しかしまたリュルの『学問の樹』にも見られる。

3-3. リュルの『学問の樹』と百科事典

リュルの方法はただ単に幾つかの円盤を回転させて多くの命題を生み出すだけではない。彼はさらに『智恵の樹』という拡張を施して知識の体系化を試みている。少しだけ解説を加える。

『学問の樹』は「根」に 9 個の位格と 9 個の関係的原理を持っている。これは第 1 図形の神的位格と第 2 図形の関係的原理に対応する。また先ほどの「枝」からはさらに 16 本に枝分かれして、それぞれに 1 本の樹になっていく。元素の樹、植物の樹、感覚の樹、表象の樹、人間と道德の樹、天の樹、天使の樹、神の樹、道德の樹、永世の樹、聖母の樹、キリストの樹、皇帝の樹、使徒の樹、実例の樹、問題の樹がそれである。

「元素の樹」を例にとると、まず「根」は、原理、原則に対応する。次の「幹」はカオスで物体が混乱した状態のままになっていて、形状のない単位である。「枝」はそのカオスから生じた四大(火、空気、水、地)であり、基本要素を構成。「小枝」には炎、大気、海や川、大地があり、合成要素に当たる。その先の「葉」には質、量、関係、時間、場所、行動、情熱、習慣、状態が列挙されていて、偶有性の概念である。「花」には手、目、脚、耳、舌などがあって、これは手段になる。一番上にある「実」には、石、黄金、魚、鳥、人間などの個物が来る。他の 15 本の樹もすべて、根、幹、枝、小枝、葉、花、実に分けられてゆき、壮大な体系をなす。樹々の体系は現実界の組織を描き出しているのだから、まさにこの故に「真実の」知識の体系を反映している、つまりは知識の集大成を目指したものである⁽³⁰⁾。百科全書派の嚆矢と言うに十分に値するだろう。

勿論、百科全書はいわゆる全書派の独占物ではない、古代ローマの大プリニウスの『博物誌』37 巻やセビリャのインドルス《語源論》20 巻は有名であるし、リュル以前にも各国で数多く出版されている。なお《語源論》はギリシャ語の「エチュモン」(本物)と言う語から取った名前で確かに語源にも触れているが大部分はいわゆる Folksethymologie に属するものであてにならない。しかし中には human の語源がラテン語 humus(土)であると正しい答えを出しているものもある。

3-4. 錬金術と暗号

リュルの「術」はまたヘブライ神秘主義のカバラ思想と密接な関係があるとされる。ということはややもすれば、秘教的あるいは魔術的傾向を帯びやすい。リュルが錬金術師と考えられたこともある。この度が過ぎると正しいはずの「術」が人々を欺くための「術」に転化する危険もあり事実そのような時期もあった。

円盤を幾つか回転させて文字の結合を得ると言うことはそのまま暗号と関係する、事実暗号機は幾つかの回転する円盤から出来ている。例えば第2次世界大戦中にナチスドイツ軍が使用したので有名なエニグマ暗号機は3個の円盤が26進法のナンバー・リングのように回転するから、26の3乗=17,576の周期で乱数や換字表が作成できて、しかもどの乱数表を使用するかまたどの換字表を使用するかという内部規約が加わるから殆ど無限の暗号が作成出来ることになる⁽³¹⁾。

勿論、現在の暗号はもっと込み入っている。一見何の変哲もない画像内に、さらに幾つかの画像ないし、暗号を含ませる steganography (秘字表記法、あぶり出し式暗号あるいは隠し絵式暗号) がインターネットを通して配信されていると言われていているし、あのフェルマーの定理の証明に際して重要な役割を果たした楕円関数を使うものもあるようだ。暗号にはその名が示すように何か暗いイメージが付きまとうが、現在のように電子取引が盛んになると、公開鍵方式のいわゆる明るい暗号が重要になってくる⁽³²⁾。

4. AI 思考との関係

20世紀後半最大の発明の一つにコンピューターが挙げられるのは間違いない。初期は弾道計算や原爆、水爆製造の膨大な計算をこなす必要性から生まれた計算機械だったのである。勿論今でもその重要性は変わらない。多数の天体相互間の重力計算、分子間のクーロン力計算のため1秒間に6兆回の演算をこなす専用機もあるのだ。

しかし現在では人工知能 (Artificial Intelligence、AI) あるいは知識工学のための道具でもある。そのためには言語を扱う必要がある。事実自然言語理解は人工知能の歴史を通じて、最も核心的なテーマだった⁽³³⁾。

コンピュータ内で言語を扱う際に、主に用いられる演算は、論理演算として、and (論理積)、or (論理和)、not (否定)、xor (排他的論理和) で他にあまり使われないが他に imp (包含)、eqv (同値) があり、それに関係演算 (大か小か等しい) である。内部ではこれらの演算子と変数 (記号) がそれらの間の形式的、機械的操作を示す関数あるいはサブルーティン (プログラマーの分担部分) を通して高速で組み替えられているのである。何のことはない、結局は円盤の回転による文字 (概念) を電子化したものと言える。このように西垣通が言うように知識工学=人工知能のよってたつ記号計算主義の源流をたどると、13 世紀のフランシスコ会士、ライムンドゥス・ルルスのカバラ的言語機械にゆきつけるのである⁽³⁴⁾。

さらに AI がうまく機能するためには、その元になる膨大な知識の蓄積が必要になる。AI が別名、知識工学あるいはエキスパート・システムと言われる所以である。これもコンピュータの得意とする所である。その特徴は〈知識は力である〉というスローガンに集約される。知識はどのようにして得るのか。紙や本がなかった時代には、自分の脳に蓄えるほか無かった (内部記憶)。従って古代や中世に記憶術があれば何でもはやされ、重要視されたのである。しかし印刷術の発明以降は本という強力な外部記憶装置が出現した。現代ではそれがコンピュータのメモリやハードディスク、CD-ROM、DVD に蓄えられさらにインターネットを通じて全世界から情報を瞬時に得られるようになった。まさに記憶術の延長上にあるものが、「人工知能」そのものと言えるのである⁽³⁵⁾。20 数巻に及ぶ百科事典もたった 1 枚の DVD に収まってしまおうし、検索条件を絞り込めば必要な情報が直ちに入手できる。

このような時代には黒崎政夫が一昔前のあるカント研究者の例を紹介しているが結局は徒労でしかないだろう。「カント全集全 30 巻から「直感」という単語の用例をもらさず調べ出して、それを年代順に並べて『カントにおける直感概念の遍歴』という大著を書くつもり。基礎資料を作るだけで私の一生は終わるかも知れないが、次の世代の研究者には役に立つかも知れない」⁽³⁶⁾。

5. 最後 に

私は生成文法理論がリュルに遡ると主張しているわけではない。私が言いたいのは精神面を扱う思想ないし理論は精査すればいつの時代にも根本的には同じようなものが見いだせるかも知れないということだ。ただ時代によってその方法が異なってくるだろう。その時々で使える手段が違ふしその時々で最良の方法を用いているのだ。

以上でリュルに関する小論は終わりにするが、イエイツも「ヨーロッパの伝統において疑いもなく極めて重要であったその思想」⁽³⁷⁾ と言っているように、もっと研究されてよいのではないだろうか。

注

- (1) エーコ、『完全言語の探求』、p. 74
- (2) ダンテ、『ダンテ俗語詩論』、p. 18
- (3) エーコ、前掲書、p. 78
- (4) ダンテ、前掲書、p. 156 の注 57
- (5) エーコ、前掲書、p. 79
- (6) ダンテ、前掲書、pp. 10-13
- (7) ロウビンズ、R. H、『ヨーロッパ古代中世文法論』、pp. 6-7
- (8) ハリス、ロイ/テイラー、タルボット、J、『言語論のランドマーク』、p. 80
- (9) エーコ、前掲書、p. 171
- (10) ヤグエーロ、マリナ、『言語の夢想者』、passim
- (11) エーコ、前掲書、p. 173、ロウビンズ、R. H、前掲書、p. 8 脚注
- (12) チョムスキー、『デカルト派言語学』、p. 18
- (13) チョムスキー、『デカルト派言語学』、p. 102
- (14) C. ランスロー、A. アルノー、『ポール・ロヤイヤル文法 (一般・理性文法)』、前書き、あとがき
- (15) チョムスキー、ノーム、『言語と思考』、p. 97
- (16) 福井直樹、『自然科学としての言語学』、pp. 8-10
- (17) ピンカー、スティーブソン、『言語を生み出す本能、下』、P. 104
- (18) 中村雄二郎、『トボス論、中村雄二郎著作集、X 巻』、p. 198
- (19) カラザース、メアリー、『中世ヨーロッパの情報文化 記憶術と書物』、p. 19
- (20) カラザース、メアリー、前掲書、p. 28
- (21) カラザース、メアリー、前掲書、p. 22
- (22) 井筒俊彦、『コーランを読む、岩波セミナーブック 1』、pp. 7-8

- (23) 森田安一担当分、『クロニック世界全史、「書写から印刷へ」』、p. 430
- (24) Chomsky, Noam, “Syntactic Structure”, p. 13
- (25) エーコ、前掲書、pp. 97-99
- (26) エーコ、前掲書、p. 112
- (27) エーコ、前掲書、p. 389
- (28) エーコ、前掲書、p. 386
- (29) エーコ、前掲書、p. 395
- (30) エーコ、前掲書、pp. 106-111、ロッシ、『普遍の鍵』、pp. 83-84、Cruz Hernández、
“El pensamiento de Ramón Lull”, pp. 125-144
- (31) 長田順行、『暗号—原理とその世界』、pp. 281-285
- (32) 辻井重雄、『暗号、ポストモダンの情報セキュリティ』、pp. 227-235
- (33) 西垣通、『秘術としての AI 思考』、p. 73
- (34) 西垣通、『ペシミスティック・サイボーグ』、p. 257
- (35) 西垣通、『秘術としての AI 思考』、p. 109
- (36) 黒崎政男、『哲学者クロサキの MS-DOS は思考の道具だ』、p. 226
- (37) イエイツ、フランセス、『記憶術』、p. 209

参考文献

- Chomsky, Noam, *Syntactic Structures*, Mouton and Co., The Hague, 1957
- Cruz Hernández, Miguel. *El pensamiento de Ramón Lull*, Castalia, 1977
- Riber, Lorenzo, *Raimundo Lulio*, Labor, Madrid, 1949
- Urvoy, Dominique, *Penser l'Islam Les présupposés islamique de l'《Art》 de Lull*, Vrin, Paris, 1980
- イエイツ、フランセス、『記憶術』、玉泉八州男訳、水声社、1993
- イエイツ、フランセス、『薔薇十字の覚醒』、工作舎、1986
- エーコ、ウンベルト、『完全言語の探求』、上村忠男・廣石正和訳、平凡社、1995
- 井筒俊彦、『コーランを読む、岩波セミナーブック 1』、岩波書店、1983
- 樺山紘一他編集、『クロニック 世界全史』、講談社、1994
- カラザース、メアリー、『中世ヨーロッパの情報文化 記憶術と書物』、別宮貞徳訳、工作舎、1997
- 共同訳聖書実行委員会、『新約聖書』、1982
- 黒崎政男、『哲学者クロサキの MS-DOS は思考の道具だ』、アスキー、1993
- C. ランスロー、A. アルノー、『ポール・ロヤイヤル文法 (一般・理性文法)』、南館秀孝訳、大修館、1972
- ショーレム、ゲオルグ、『ユダヤ神秘主義』、河出書房新社、1975
- ダンテ、『ダンテ俗語詩論』、岩倉具忠訳、東海大学古典叢書、1984

- チョムスキー, ノーム, 『デカルト派言語学』, 川本茂雄訳, テック, 1970
- チョムスキー, ノーム, 『言語と思考』, 大石正幸訳, 松柏社, 1999
- チョムスキー, ノーム, 『文法の構造』, 勇康雄訳, 研究社, 1962
- 辻井重雄, 『暗号, ポストモダンの情報セキュリティ』, 講談社選書メチエ, 1996
- 中村雄二郎, 『トポス論, 中村雄二郎著作集, X 巻』, 岩波書店, 1993
- 長田順行, 『暗号—原理とその世界』, ダイヤモンド社, 1971
- 西垣通, 『秘術としての AI 思考』, 筑摩書房, 1990
- 西垣通, 『ペシミスティック・サイボーグ』, 青土書房, 1994
- バラン, ブリース, 『ことばの思想史』, 三嶋唯義訳, 大修館書店, 1972
- ハリス, ロイ/テイラー, タルボット, J, 『言語論のランドマーク』, 斉藤伸治/滝沢直宏
訳, 大修館, 1997
- ピンカー, スティーブン, 『言語を生み出す本能, 上, 下』, 椋田直子訳, NHK ブックス,
1995
- 福井直樹, 『自然科学としての言語学』, 大修館, 2001
- ヤグェーロ, マリナ, 『言語の夢想者』, 谷川多佳子・江口修訳, 工作舎, 1990
- ロウビンズ, R. H, 『ヨーロッパ古代中世文法論』, 郡司利男訳, 南雲堂不死鳥英語学選
書, 1692
- ロッシ, パオロ, 『普遍の鍵』, 清瀬卓訳, 世界幻想文学大系第 45 巻, 国書刊行会, 1984